

京都女子大学図書館所蔵伝宗長筆『秋篠月清集』攷

山中 亜紗子

はじめに

京都女子大学図書館が所蔵する秋篠月清集写本には、すでに『京都女子大学図書館蔵谷山文庫目録』に記載されている谷山茂氏旧蔵本（090/T288/494、0004989023・0004989031）^{〔1〕}のほか、室町時代後期の連歌師・柴屋軒宗長筆との極めを有するものがある（KN911.148/F68、0083182071・0083182080）。秋篠月清集は平安時代末期の歌人藤原良経の家集で、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースを用いて写本の存在を検索してみると、その数は三十六件に上る。この伝宗長筆秋篠月清集は、右のデータベースだけでなく、『国書総目録』にも『私家集伝本書目』にもそれと思しき資料は見当たらず、これまでその存在を知られなかった写本である。永承五（一五〇八）年写との奥書を有しており、秋篠月清集のなかには、近い年代に書写された本やそれを経た系統の写本も多いことから、そこに本写本が加わることで諸本間の関係性をより明確に捉え直すことができるのではないかと期待される。

本稿では、この伝宗長筆本の書誌事項を紹介し、伝宗長筆本の特徴から類推される、秋篠月清集諸本の関係について

再検討を行う。そして、それによって本書の持つ写本としての性格を明らかにしようとするものである。

一 基本的書誌事項

伝宗長筆本は、二三・八×一六・二厘の列帖装。集組織は上下二巻の二冊本で、「秋篠月清集 上下 宗長筆」との題簽が貼られた塗り箱に納められている。表紙は紺色を基調とした亀甲繫ぎ地に梅花が配された紋織物で、本文とは別筆と思われる「月清抄上」「月清抄下」との題簽を持つ。上下巻ともに見返しは金泥紙。一面十二行で、和歌は一首一行書き。古筆了雪の極印が押された「連歌師宗長」との極札が下巻末の遊紙部分（五〇丁表）に付されている。極札とともに「享祿五年（天文元年）八拾五才ニテ没ス 昭和十一年辺ニテ四百五年ニ成ル（後略）」と書かれた紙片が添付されており、それとは別筆の「連歌師宗長ハ宗祇の門人にして文亀年中に没す 大正貳年にて凡四百年成（後略）」と記される紙片が箱に付属している。しかし、宗長筆であるかの真偽はわからない。

上巻全五八丁には定数歌が収録され、墨付は五五丁。二丁裏に「式部史生秋篠月清集上」との内題と、花月百首から院句題五十首（本文では「上皇初度百首」をうけて「同句題五十首」と表記）までの目次が記される（稿末図Ⅰ）。目次末尾に「已上千首」とあるが、本書独自の配列の不備とそれにもなう欠歌²によって、実際の収録歌数は九九八首となっている。下巻には部類歌が収められ、上巻同様二丁裏に「式部史生秋篠月清集下」との内題を有し、その直後から部類歌春部が始まる。全五〇丁で、墨付は四八丁。収録歌数は六一四首。全体に朱墨点・集付を有し、一部に本文と同筆と思われる朱と墨による書入が見られる。なお、上巻末と下巻末とに奥書を有するが、それについては後述する。

二 秋篠月清集諸本における伝宗長筆本の位置付け

1、秋篠月清集の本文系統

秋篠月清集の諸本とその本文系統について、現在共有されている諸本の現状を簡単に整理しておきたい。⁽³⁾

秋篠月清集は主として二系統にわけられており、新編国歌大観・私家集大成などが底本として使用するものが定家本系統である。代表的な写本としては、天理図書館甲本、静嘉堂文庫本などが知られ、天理図書館甲本は、まさに定家とその側近の子女によって書写されたものである。その部類歌末尾には、定家による次の識語が付されている。

是御平生之時所被注置之本也、夢後書留之粗一見了、御本忿返上之間不見中書之草、字誤無極、不晴覺事不能直付

安貞二年五月二日

これによれば、定家本系統の祖本は良経が生前手元に置いていた本であり、それを良経没後に書き留めたものの、おぼつぱに見て急いで返したので誤りが多いことが記されている。なお、「夢後書留之」とはあるが、識語末の安貞二(一二二八)年は、良経が没した元久三(一二〇六)年から二十二年後のことである。

一方で、定家本とは異なる事情によって発生したものが、教家本系統である。教家本系統の存在をはやくに指摘した松田武夫氏は、教家本系統のなかでも、大島雅太郎氏旧蔵本である日本大学図書館本(以下、日大本と称す)⁽⁴⁾こそが「最も書写年代旧く、且又最も正しく原形を伝える所のもの」であるとした。⁽⁵⁾その日大本は、下巻末尾に次のような奥書を持つ。

日大本下巻末奥書

① 本云

承久三年十一月廿六日書了

此合点者前大僧正釈阿入道兩人之点也、不可有他見歟

権大納言 藤原 御判

② 安貞二年十一月廿日以前宮内卿^{家隆}任了自筆本書寫畢、合点之長短取寸法合移畢

③ 以件本重書寫之

文永五年十二月十八日

一校了

④ 応永十六年臘下一日以冷泉中納言為尹卿本書寫畢

隠士得清

⑤ 本云

応永廿七年臘月朔日

年少之筆跡雖有其积為錢別之献之所也

千松末葉一花余芳

正徹 判

①と②の間には勝負数注記が、④と⑤の間には朱墨点注記が存在するが、ここでは割愛した。この奥書によれば、まずは承久三（一二二二）年に慈円・俊成の合点の入った本が「権大納言藤原」によって書写され①、安貞二（一二二八）年に家隆自筆本が書写され②、さらに文永五（一二六八）年に同じく家隆自筆本が書写され③、また応永十六（二四〇九）年には冷泉為尹本が「隠士得清」によって書写された④という経緯が明らかにされたうえで、日大本

の親本は応永二十七（一四二〇）年に正徹の手元にあった本である（⑤）ということがわかる。松田氏は、①の「權大納言藤原」を教家であるとし、それによって当系統は教家本系統と呼ばれてきた。また、④の「隠士得清」については、稲田利徳氏によって正徹であることが指摘されている。^⑦ ①奥書にあるように、教家本系統は、良経が慈田と俊成に合点を乞うた本を、良経の息教家が書写した本を祖としており、教家本系統の諸本は④までのいずれかの奥書を有している。これら定家本系統・教家本系統諸本は、片山亨氏『校本秋篠月清集とその研究』^⑧において体系的に細分類され、主要諸本の異同が提示されている。たとえば教家本系統は、④の隠士得清本から派生した第一類、冷泉為尹本を応永十七（二四一〇）年に今川範政が書写した本の系統である第二類、集組織の異なる第三類に分類され、第二類の河野信一記念文化館本（以下、河野本と称す）を底本に、第一類に属する日大本、現在所在不明と聞く片山氏旧蔵の明応二年奥書本（以下、片山本と称す）、蓬左文庫本（以下、蓬左本と称す）、書陵部甲本（桂宮本）（以下、桂宮本と称す）、神宮文庫本（以下、神宮本と称す）の異同が示されている。さらに、右の五本に関大本上巻を加えた教家本系統第一類の六本は、書写の経緯と内容によって、A 隠士得清本系統、B 教賢僧正本系統、C 玄旨本系統、D 正徹本系統に分けられる。また、定家本系統・教家本系統のほか、定家本系統を教家本系統で、あるいは教家本系統を定家本系統で校合した混淆本系統という第三系統の存在が、片山氏によって明らかにされており、定家本系統を底本とするものが第一類、教家本系統を底本とするものが第二類とされている。

2、伝宗長筆本の属する系統

秋篠月清集本文の系統を検討する際、定家本系統と教家本系統とは、朱墨点の有無や欠歌の状況、配列の一部が異なるため、それらの観点よりとりあえず系統の別を判断することが可能である。たとえば、教家本系統には、元久元

(二二〇四) 年十一月の北野宮歌合に関連する歌(教家本一三四〇・教家本一四六四)が見られることや、九二が八二の前、一〇七四と一〇七五が逆、一四八〇が一四八四の前に配されるなどの特徴がある。その他の特徴も含め、伝宗長筆本は教家本系統の特徴と悉く合致することから、教家本系統に属するものと考えられる。さらに、本書が教家本系統であることの裏付けと、教家本系統のなかでもいずれの系統に分類されるかということの手がかりを、その奥書より探りたいと思う。

伝宗長筆本下巻末奥書

承久三年十一月廿六日書寫畢此合點者
前大僧正釈阿入道両人之點也不可有他
見欵

權大納言藤原御判

(以下四行分空白)

安貞二年十一月廿日以前宮内卿家隆自筆
本書寫畢合點之長短取寸法合移之

以件本重書寫之

文永五年十二月十八日

應永十六年臘下一日以冷泉中納言為尹

本書寫畢

隱士得清

「四九表

日大本①に相当

日大本②に相当

日大本③に相当

日大本④に相当

(一行分空白)

于時永正五年八月十九日書寫畢

一校合

(以下、二行分空白)

「四九裏

右にあげたものが、伝宗長筆本下巻の奥書である。まず四九丁表の部類歌の末尾に①に相当する奥書が記され、丁を改めて②③④に相当する奥書、それに次いで本書の書写奥書が記される。なお、勝負数及び朱墨点に関する注記は本書のどこにも見られない。

以上のように、伝宗長筆本は、慈円・俊成の合点を持つ本を祖本とすることを示す①をはじめ、②③④に相当する奥書を有することから、やはり教家本系統に属するものといえる。なかでも、④応永十六年の隠士得清本を書写したものとされるため、奥書の所伝より判断すれば、伝宗長筆本は教家本第一類のA隠士得清本系統に分類される。④の隠士得清本は教家本第一類の祖となる本であり、その転写本であるならば、教家本系統諸本のなかでも日大本に次いで隠士得清本に近い写本ということになる。なお、教家本系統第一類諸本と今回紹介する伝宗長筆本の奥書に記された伝来の経緯とを、私に図示したものが稿末の付表である。

3、伝宗長筆本の上巻奥書の存在

奥書よりその系統を判断すればA隠士得清本系統に分類される伝宗長筆本であるが、A隠士得清本系統の唯一の伝本たる日大本とは大きく異なる点がある。そのひとつが、上巻にも奥書を有することである。

伝宗長筆本上巻末奥書

本云

應永十六年臘月十四日以冷泉中納言

為尹卿本書寫畢

隠士得清

(以下、四行分空白)

「五六表

上巻の定数歌部末尾に記された右の奥書(稿末図Ⅱ)は、日大本の④奥書に対応するものであり、④が「下一日」とあるのに対して「十四日」という日付になっている。応永十六年に隠士得清本を書写した日付として、上巻は十二月十四日、下巻は十二月二十一日であったものと思われる。

先に掲出した日大本の奥書が下巻のみであったのは、そもそも日大本が上巻に奥書を有していないためである。奥書に記される書写の経緯のみを見れば、伝宗長筆本は教家本系統第一類A隠士得清本系統に分類されるが、その奥書においても、日大本と異なる点があることは特筆すべきことであると考ええる。

4、片山本・関大本上巻との類似

先に見たとおり、伝宗長筆本には日大本には見られない上巻奥書が存在する。実は教家本系統には、伝宗長筆本と同じく上巻奥書を有する写本がほかに二本存在する。片山本と関大本上巻である。

片山本上巻末奥書

応永十六年臘月十四日以冷泉中納言為尹卿本書寫了

関大本上巻末奥書

応永十六年臘月十四日以冷泉中納言

為尹卿本書了

正徹廿九歳名也
隠士得清

中比改名正清兩三年間歟

黒衣已後正徹

康生三年六月十五日重而写之

依老耄落字等多之 正徹七十七歳判在

一校了以寸法写点也

文亀三癸亥年五月上旬写訖

一校了

右筆同主伊佐幸綱

今度賀悦乱入之時求之

主一世

片山本は、右の上巻末のほかに下巻末にも奥書を有している。下巻には日大本①②③④に相当する奥書と、文安三（二四四六）年に教賢僧正が書写した本の系統であることを示す奥書、そして明応二（二四九三）年七月にその教賢僧正本を書写したとする書写奥書があり、それによってB教賢僧正本系に分類される。江戸時代初期写とされる関大本上巻は、伝宗長筆本の上巻末奥書に相当する奥書に続いて、康生三（一四五七）年に再び正徹が書写した本の系統であることが示され、これによってD正徹本系統に分類される。上巻奥書を有する片山本・関大本上巻も、教家本系統第一類に属する以上隠士得清本から派生したものであり、さまざまな経緯を経ているとはいえ、隠士得清本の姿を少なからず残しているはずである。そのため、片山氏は片山本が上巻奥書を持つことに触れ、「本書（稿者注…日大本）の奥書は

教家本諸本中最も詳細であるが、(中略)上冊奥の奥書を欠いている」(四〇二頁)とする。片山氏が指摘するように、A隠士得清本系統の唯一の伝本である日大本が、上巻奥書を持たないという事実は、奥書の所伝上同じA隠士得清本系統に分類される伝宗長筆本との関係を考えるうえでも、重要なことであると思われる。

伝宗長筆本と同じく上巻奥書を有している関大本上巻は、片山氏が「本文内容は架蔵本に近く」(四〇九頁)と述べるように、片山本に近いとされる。奥書の所伝を見る限りでは系統が異なる二本において、見いだせる共通点といえは上巻奥書を有することである。それこそが、二本の内容の近さにも影響していると考えられるのではなからうか。つまり、上巻奥書の有無と内容の相違とは、相関するものではないかと思われるのである。

その可能性を感じさせるひとつの例が、勝負付の有無である。教家本系統第一類諸本において、片山本と伝宗長筆本のみが勝負付を持たない⁽¹⁰⁾。上巻奥書を持つ二本が互いに勝負付を持たないということは、なにがしかの関係性をうかがわせる。

上巻奥書の有無と内容の相違との関係について、その検証を可能とするものが、伝宗長筆本である。上巻奥書を有する伝宗長筆本の内容が日大本に近いのか、片山本・関大本上巻に近いのかを検討し、上巻奥書の有無による内容の相違が確認されれば、それは、相関関係が存在することの傍証となりえよう。以下、伝宗長筆本の特徴を明らかにしながら、その傾向を日大本、片山本・関大本上巻をはじめとする教家本諸本と対照しつつ、上巻奥書の有無が内容の相違と関連する可能性について検証する。

三 朱墨点

1、左合点の有無

伝宗長筆本が、日大本に近いのか、片山本・関大本上巻に近いのか、まずは朱墨点に見られる特徴を対照していきたい。日大本の朱墨点に関しては、④と⑤の奥書の間に「墨点百五十一首^{此内左右}前大僧正慈鎮／朱点三百六十首^{此内左右}六首^{此内左右}釈阿入道」という注記があり、朱墨点の数が記されている。しかし実際の合点数は、墨点が一五一首、朱点が三六五首であり、割注にある左右点に関しては、墨点一三首、朱点六首とされている。これに対し伝宗長筆本には朱墨点に関する注記はなく、実際に付せられた箇所を数えると、墨点一五〇首、朱点三五二首で、全三六四首となっている。^①

日大本の朱墨点注記にあるように、日大本は左合点を有する。この左合点は伝宗長筆本には見られず、さらに、教家本系統第一類諸本においては、片山本と関大本上巻のみが同じく左合点を持たない。片山本・関大本上巻とも、他本が左合点を有する箇所については、左合点のみを記さないという態度をとる。これについて片山氏は、教賢僧正本から派生したC玄旨本系統諸本が左合点を有するにも関わらず、片山本が左合点を持たないのは「脱落ということになる」(四四二頁)とするが、左合点を「持たない」ということが、むしろ片山本やそれに近い関大本上巻、そして伝宗長筆本に共通する朱墨点の特徴といえるのではなからうか。系統を異にする三本が共通して左合点を持たないという事実が、関係性の近さを感じさせるのである。

2、伝宗長筆本の特徴―下句への加點

左合点を持たない伝宗長筆本の特筆すべき点として、下句への加點があげられる。下句にも合点を有する本は、教家

	勝負	歌番号	初句	宗長本	日大本	片山本	蓬左本	桂宮本	神宮本	関大本上巻
六百番歌合	勝	355	いくよわれ	朱墨 下墨	朱墨 左墨	朱墨	朱墨 左墨	朱墨 左墨	朱墨 左墨	朱墨
	持	386	おもひかね	朱墨 下墨	朱墨 左墨	朱墨	朱墨 左墨	朱墨 左墨	朱墨 左墨	朱墨 下墨
老若五十首歌合	持	925	くもほみな	朱墨 下朱墨	朱墨 左朱墨	朱墨	朱墨 左墨	朱墨 左朱墨	朱墨 左墨	朱墨
仙洞句題五十首		976	ゆくすゑは	朱墨 下朱	朱墨 左朱	朱墨	朱墨 左朱	朱墨 左朱	朱墨 左朱	朱墨
和歌所影供歌合	勝	1128	ひとすまぬ	朱 下朱	朱 左朱	朱墨		朱 下朱	朱	
十題二十番撰歌合		1406	かすがやま	朱墨 下朱墨	朱墨 左朱墨	朱墨		朱墨 下朱墨	朱墨 下朱墨	
建仁元年 十五夜撰歌合当座		1480	わすれじと	朱墨 下朱墨	朱墨 左朱墨	朱墨		朱墨 下朱墨	朱墨 下朱墨	
春日社歌合	持	1591	あまのとを	朱墨 下朱墨	朱墨 左朱墨	朱墨		朱墨 下朱墨	朱墨 下朱墨	

※蓬左本・関大本上巻が朱墨点を有するのは、定数歌部（1～1000）のみ。

※歌番号は該当する新編国歌大観歌番号を用いた。

※網掛けは、宗長本と一致することを示す。

表1 伝宗長筆本が下句合点を有する箇所における教家本第一類諸本朱墨点対照表

本系統第一類においては関大本上巻とC玄旨本系統の桂宮本・神宮文庫本がある。伝宗長筆本が下句に合点を有する箇所は全八箇所であり、それぞれ教家本系統第一類の加点点状況を表1に対照した。表1に示した箇所以外に、他本が下句に合点を有する箇所はない。つまり、伝宗長筆本は諸本中もっとも多くの下句点を有しているのである。なお、関大本上巻は三八六を除けば片山本と同じく通常の朱墨点しか持たないため、どのような経緯で一首のみ下句に合点が付されているかは不明だが、唯一一致する伝宗長筆本との関連をうかがうことができる事例といえる。

伝宗長筆本が下句に合点を有するこの八箇所すべてに共通するのは、伝宗長筆本の下句点が日大本の左合点と一致するということである。慈田と俊成のほか想定される加点点者は見あたらないため、左合点も下句点もどのような意図で付されているかはわからない。必ずしも上句と一致しないところを見ると、下句点には下句点独自の意味合いがあるようにも思われる。八首はいずれも新古今和歌集入集歌であり、そのような意味では秀歌とみなされるものでは

あろうが、この八首が特別に秀でていとも思われない。勝負のわかる歌合歌に關しても、負けこそないものの持であるものもあり、詠作当時の評価も芳しいとはいえない。それは下句のみを見てもそうであり、制詞とされる句であるわけでもなく、この句が強調される理由は見いだしがたいのである。それゆえ、ただ機械的に左合点の再現を試みたとも考えられなくもないが、この八箇所以外にも日大本が左合点を付す箇所は多い。また、歌頭に付される左合点と下句に記される下句点とが、相互に変換されうるものとも考えにくい。よって、伝宗長筆本の下句点が日大本の左合点と一致するからといって、そこに日大本との直接的な關係性を求めることはできないものと考ええる。

以上、伝宗長筆本の朱墨点の特徴を確認しつつ、日大本及び片山本・関大本上巻と比較した。伝宗長筆本の朱墨点には、日大本が有する左合点が見られない。その特徴は片山本・関大本上巻と一致する。さらに、伝宗長筆本の朱墨点の最大の特徴である下句への加点は、一首のみではあるが関大本上巻にも見られるものであった。本書の下句点は日大本の左合点と共通するものの、そこに關連性を見出すことはできず、総じて日大本との關係は希薄であるといえよう。朱墨点という観点から見れば、上巻末尾に奥書を有する本書は、片山本・関大図書館本との近さを感じさせるのである。

四 集付

1、日大本・片山本の特徴

朱墨点のほか、もうひとつ、伝宗長筆本文に付属するものに集付がある。伝宗長筆本・日大本・片山本における集付の状況を対照したものが、表2である。関大本上巻に關しては、上巻の五〇首にしか集付が付されていないため除外した。なお、伝宗長筆本において唯一「続子」と記された七〇二「はるはなほ」は、新統古今和歌集・春上・六に入集する歌であるが、新統古今和歌集は永享十一（一四三九）年成立であるため、「続子」が新統古今和歌集であることを

該当歌集	伝宗長筆本			日大本			片山本		
	集付	総数	誤記	集付	総数	誤記	集付	総数	誤記
千載和歌集	千	5		千	7		千	7	
新古今和歌集	新古	81	3	新古今・新古	82	4	新古	81	5
新勅撰和歌集	新勅	34		新勅撰・新勅	32	1	新勅	37	1
続後撰和歌集	続後	21		続後撰	28	1	続後	34	9
続古今和歌集	続古	24	1	続古今・続古	22	1	続古	26	
続拾遺和歌集	続拾	10		続拾遺・続拾	7	1	続拾	15	
新後撰和歌集	新後	12		新後撰	11		新後	5	1
玉葉和歌集	玉	11		玉葉	16		玉	14	
続千載和歌集	続千	12	1	続千載・続千	11	1	続千	11	
続後拾遺和歌集	続後拾	11	1	続後拾	6		続後拾	9	
風雅和歌集	風	12		風雅	17	3	風	10	
新千載和歌集	新千	8		新千載	7		新千	8	1
新拾遺和歌集	新拾	8		新拾	7		新拾	7	
新後拾遺和歌集				新後拾	12	1	新後拾	8	1
新続古今和歌集	続子	1		新続古	26		続古	27	1
雲葉和歌集				雲葉	1				
万代和歌集				万	2				
合計		250	6		294	13		299	19

※総数には「同」と記されたものも含む。

表2 伝宗長筆本・日大本・片山本集付対照表

示す集付であったならば、本書の親本とされる応永十六（一四〇九）年写の隠士得清本には存在しない集付ということになる。同じく日大本も新続古今和歌集入集歌であることを示す集付を持つが、日大本の親本である応永二十七（一四二〇）年写の正徹餞別本にも存在しなかったはずのものである。

片山氏は「教家本系統で集付の最も詳細なものは日大図書館本と架蔵本である」（五三〇頁）としており、日大本・片山本の集付は質量ともに充実しているが、その二本の集付にははっきりした違いがある。

まず表記について、表2にあるように、日大本は「続後撰」「新後撰」など、片山本より明確に集名が略される。さらに「新後撰尺教」というように部立が記されることもあり、より詳細な記述を持つ箇所もある。また、日大本集付の最大の特徴は、勅撰集だけでなく雲葉和歌集や万代和歌集といった私撰集の集付を有するほか、「入」という記号を二〇〇箇

所近く付すことである。この「入」という記号について片山氏は、「おそらく私撰集入集歌を示す記号かと思われるが、現行のいずれの私撰集とも一致しない」(五三一頁)とし、この記号を隠士得清本系統による集付の特徴とみなしている。教家本系統第一類においては、日本本と蓬左本にのみ付されるものであるが、関大本上巻の三〇二「そらはなほ」に唯一この記号が見られる。三〇二は、新古今和歌集・春上・二三に入集する歌であり、日本本も関大本上巻も「入」の記号のほかに「新古」の集付も持つ。蓬左本はここに「入」の記号のみを付しているが、やはり何を意味するのかはわからない。関大本上巻の集付は、この一箇所からの「入」を除けば明らかな日本本の影響も見られず、上巻部分五〇首にしか集付を持たない関大本上巻の、この一箇所から日本本との関係性を判断するのは難しい。

一方の片山本の集付は、範囲が勅撰集のみとなっており、もちろん日本本に見られる「入」の記号も見られない。

2、伝宗長筆本との比較

伝宗長筆本の集付は、表2にあるとおり、表記も片山本と一致し、その範囲も勅撰集のみとなっている。さらに、隠士得清本系統の特徴である「入」の記号も持たないことから、伝宗長筆本の集付が日本本とは異なる系統に属することは明らかである。

また、片山本は四六九に「新古」の集付を付すが、これについて片山氏は「これは康生三年(一四五七)正徹書写本系と目される関大図書館本上巻と同じ誤記でなんらかの関連が考えられる」(五三三頁)と述べている。この誤記は、集付を有する諸本において片山本・関大本上巻のみに見られるものであるが、同じく伝宗長筆本も四六九に「新古」の集付が付されている。四六九は、私撰集では夫木和歌抄・雑五・海・一〇二六三に採られてはいるものの、ほかの勅撰集入集歌であるわけでもなく、「新古」という集付は完全な誤記である。新古今和歌集入集歌とみなされる根拠も不明

であり、この誤記の共通は、やはり「なんらかの関連性」を想定すべきものであるといえよう。

奥書の所伝ではA隠士得清本系統に属するものとされながら、伝宗長筆本の集付が日大本の系統でないことは、隠士得清本系統の集付の特徴である「入」の記号を持たないことから明らかである。それだけでなく、片山本・関大本上巻に共通する誤記が同じく本書にも見られ、なおかつ他系統の本にその例が見られないことから、集付における特徴からも、系統を異にする三本の関係の近さをうかがうことができる。集付は本文に付属するものであり、親本書写以降に書き加えられたと思しき集付も存在するが、それゆえに誤記が共通するということは、むしろその関係性をより強く感じさせるのである。

五 本文

1、独自異文の対照

朱墨点・集付を対照することで得られた、伝宗長筆本の片山本と関大本上巻との近さは、本文の傾向にもあらわれている。それぞれの独自異文を対照しつつ、それを確認していきたい。⁽¹²⁾⁽¹³⁾

まず伝宗長筆本の異文が日大本の独自異文と一致する箇所を探してみると、それはわずかに一箇所しか無い。

(夢中述懐)

染はてしうき世の色を出や^レらてなを花思ふみよしの、山

雑・一五二六

定家本系統本文が「そめおきし」とするところ、伝宗長筆本・日大本とも「染はてし」とする。詞書の異同にまで目を向けてみても、詞書が明確である定数歌部における異同の一致は無く、部類歌部詞書における独自異文を対照してみ

でも、日大本との関係性が顕著にあらわれている例は無い。独自異文の一致が一箇所のみしか無いという事実は、互いの系統が決して近いものではないことを示すものであるといえよう。

片山本の独自異文も、伝宗長筆本の異文と一致するものは三首にとどまる。これは、片山本と同じくB教賢僧正本系統に分類される蓬左本、教賢僧正本から派生したC玄旨本系統の桂宮本・神宮本と、属する系統の性質上本文が類似するため、そもそも片山本の独自異文が少ないことにもよる。

(忍恋)

人とみぬ岩の中にも分入て思ふ程にやそてしほ^られまし^朱

治承題百首・四五七

そのなかの治承題百首の右の歌は、その初句に異同があり、定家本系統本文が「ひとめみぬ」とするところ、伝宗長筆本・片山本ともに「人とみぬ」とする。伝宗長筆本は五句を「そてしほれまし」と誤写するところ、「れ」を朱にて見せ消ちして「ら」に修正するため、そのまま残されている初句の異同は誤写ではなかったものと思われる。「忍恋」という題のもとで詠まれた歌の、「人の目の届かない岩の中」が、「人と見た岩の中」ではまったく意味不明であるが、親本にあったものがそのまま踏襲された結果であろう。

さて、これまで対照してきた二本と比較して、その独自異文との一致がもつとも多いものが関大本上巻である。関大本上巻は上巻部分しか対照できないにも関わらず、一致する箇所は一九首に及ぶ¹⁴。そのなかのひとつが、次の一首である。

遠村花

訪はやたかすむ里の一村そぬしおもほゆる花のおくかな

この歌では、伝宗長筆本・関大本上巻のみがこの歌の二句「たがすむまど」を「たかすむ里」とする。これは、「万」と「左」の類似によって生じた異同と思われる。しかし、「まどのひとむら」のように、窓辺の花を詠む歌はほかに例を見ず、特異な表現であるといえよう。院句題五十首とは建仁元（一二〇一）年の仙洞句題五十首のことで、仙洞句題五十首の本文も、伝宗長筆本・関大本上巻と同じく「たがすむ里」となっており、秋篠月清集における異文が、定数歌本文と一致しているという事例のひとつである。

2、片山本・関大本上巻共通の独自異文との対照

B教賢僧正本系統とD正徹本系統という別系統に分類されながら、内容の近さを指摘される片山本と関大本上巻であるが、共通する独自異文が多くあり、さらにそれが伝宗長筆本と一致する箇所が三十四首存在する。このことは、上巻奥書を持つという共通点のある三本の、その内容的な近さをよく物語っている。

そらさえし去年のけしきも打とけて朝日は春の初成けり

十題百首・天象十首・二〇一

これは、一首において二箇所の変同を持ち、それが三本で共通する例である。定家本系統本文だけでなく、教家本諸本も「あさひぞはるのはじめなりける」とするところ、「朝日は春の初成けり」となっており、係助詞「ぞ」が「は」となったことで連体形の係り結びが解消され、必然的に五句にも異同が生じたものである。異文でありながら合理的な処理がなされているといえよう。

また、先の関大本上巻の独自異文と同じく、三本の異同が歌合や定数歌の本文に一致する例も見受けられる。

まぐす原玉まぐ数やまさるらむはにをく露に蛸とふなり

院第二度百首・夏十五首・八二七

右の二句を定家本系統本文は「たままぐくずや」とするが、三本は「玉まぐ数や」とする。この句は教家本系統諸本でも異同があり、日大本は「玉まぐ色や」、蓬左本は「玉まぐ葛や」としている。これは千五百番歌合・夏二・四百七番・左・八一二の歌で、そこでは「たままぐかずや」となっており、⁽¹⁵⁾伝宗長筆本・片山本・関大本上巻に共通する異同の妥当性が示されている。日大本も異同を有する箇所において、三本の異同が共通する事例でもあり、ここからも上巻奥書を有する三本の関係の近さをうかがうことができる。

加えて、片山氏は、片山本と関大本上巻の内容の近さを示す異同として、南海漁父百首・五七五の歌題を例にあげている(四〇九頁)。定家本系統本文が「山家十首」、教家本系統の諸本が「山家」とするのに対し、片山本は「山里」、関大本上巻は「山里^{家イ}」とする。伝宗長筆本も「山里」としており、歌題の異同においても伝宗長筆本・片山本・関大本上巻の異同は一致するのである。

六 伝宗長筆本の独自性

1、伝宗長筆本上巻末尾の配列

ここまで、奥書の有無による内容の相違あるいは一致について確認してきたが、伝宗長筆本にしか見られない独自性ももちろん存在する。そのひとつが、書誌事項を紹介する際にも触れた上巻末尾の配列である。伝宗長筆本の歌配列は、基本的に教家本系統の配列に一致するが、上巻末尾は伝宗長筆本独自の配列となっている。それがいつ生じたものであるのかを、朱墨点によって類推することができるのである。

伝宗長筆本には朱墨点の位置を誤ったと思われる箇所があり、たとえば、二一「けふもまた」に朱墨点が付されているが、ここに点を持つものは伝宗長筆本のみとなっている。教家本系統第一類諸本はいずれも一八「けふこずは」に朱墨点（片山本のみ朱の二重点。片山本が朱墨点以外の点を持つのはこのみ）が付されており、初句が類似することによるのか、本来この一八に付すべき朱墨点を誤ったものと思われる。同じ現象は八七「うきよとは」の朱点（九一「うきよいとふ」と誤る）、二四三「ゆくひとの」の朱墨点（二四四「ゆくすゑに」と誤る）、一二六九「このはちりて」の朱点（一二七二「このはちりて」と誤る）にも見られる¹⁶。

自明のことではあるが、写本に朱墨点を付すという作業は、本文を書写し終えてから写本と親本（あるいは校合本など他本）とを対照しつつ行われるものであることが、この誤りからも知ることができる。つまり、本文を書写する際に大幅な欠歌や配列の乱れが生じた場合、それに気付く機会になり得たと思われるのである。

伝宗長筆本の上巻末尾の配列を具体的に示すと、九九〇「うつりゆく」から九九六「あきはてて」までの七首十四行分が九九九「わがこひは」の後に配され¹⁷、九九七「なみたかき」が欠歌となっている。実際の配列については、稿末の図Ⅱを参照されたい。その影印にもあるとおり、まさにこの箇所にも朱墨点は付されており、この配列の乱れと欠歌が書写時に生じたものであれば、朱墨点を付す際に気が付くのではないかと思われるのである。伝宗長筆本では、書き落としたと思われる歌は朱によって行間に書入れられるものもあり、書写時のミスには修正が施されている。そのことも考え合わせると、上巻末の独自の歌配列は、本書の書写時の誤りであるとは思われず、親本以前の問題であると考えられる。また、独自の配列を持つ箇所にも朱墨点が付されていることから、本書の朱墨点は校合本など他本により書入れられたものではなく、同じ歌配列を持つ親本にあった朱墨点をそのまま転記しようとした可能性が、極めて高いといえよう。

2、伝宗長筆本の独自異文

次にその本文に目を向けてみると、伝宗長筆本には全体をとおして独自異文が多数見られる。そのひとつが、花月百首の巻頭歌である。

昔誰かかるさくらの花をうゑてよしのをはるの山となしけむ

花月百首・花五十首・一

右にあげたのは定家本本文であるが、教家本系統第一類諸本も異同はない。これに対し伝宗長筆本は、次のような本文を持つ。

昔誰か、る桜の種^{花イ朱}をうへて吉のを春の山となしけん

第三句を「種をうへて」とし、「種」には「花イ」と朱書きで異文注記を施す(図Ⅰ)。独自異文の本文に対し、定家本・教家本共通本文を異文とみなしているのである。この伝宗長筆本本文と同じ処理を行うものに、教家本系統を定家本系統で校合した混淆本系統第二類に属する書陵部丙本(東山文庫旧蔵本)(以下、東山本と称す)がある。東山本は足利義政を伝承筆者とする室町期の写本で、六家集版本の底本となったものである。そのため、六家集版本本文は「種をうへて」となっており、他出文献の歌枕名寄・二〇三三が同じく「たねをうゑて」という異文を採るのも、流布本たる六家集版本によるものと思われる。結果的に異文が流布しているという状況であるが、同じ教家本系統を本文とする室町期の写本である伝宗長筆本と東山本が同じ異文を持つことから、室町期には「種をうへて」本文の教家本が存在していた可能性を示唆している。

この巻頭歌と同じく、定家本・教家本本文を異文として扱い、本文が独自異文となっている箇所はほかにもある。

寄風恋

いつも聞物とや人のなかむらんこぬたくれの忝風の声
思イ〔朱〕

歌合百首・三七七

この伝宗長筆本の三七七番歌でも、「おもふらむ」とする定家本・教家本文を異文として扱い、「なかむらん」という独自異文を本文とする。これは六百番歌合・恋下・十七番・左（負）・九三三の歌であり、なおかつ新古今和歌集・恋四・二三二〇にも入集しており、いずれも本文は「おもふらむ」である。勅撰集歌ですら独自異文を有することから、朱墨点と同じく、本文も親本を忠実に書写したものであったと推測できよう。

もうひとつ、伝宗長筆本独自の異文において特異な箇所がある。建仁元（一二〇一）年八月十五夜に行われた後鳥羽院主催の撰歌合の一首で、定家本では次のような本文となっている。

月前松風

秋のよのひかりもこゑもひとつにて月のかつらにまつかぜぞふく

秋部・一一一五

これに対し伝宗長筆本文は、次のとおりである。

月前秋風

秋のよの光も声もひとつにて月のかつらに秋風そふく

まず歌題に異同を持ち、「月前松風」を「月前秋風」とする。もちろん撰歌合本文も「月前松風」であるから、伝宗長筆本の独自異文は誤写ということになる。しかし、歌題の異同にともなって一一一五番歌の本文も「秋風そふく」となっており、異文でありながら、歌題と歌本文の整合性は保たれているのである。

おわりに

以上、教家本系統に属する写本である伝宗長筆本の持つ特性を、日大本、片山本・関大本上巻と対照してきた。伝宗長筆本の朱墨点・集付・本文の傾向は、明らかに日大本の特徴とは一致せず、片山本・関大本上巻により近い性質のものであるという結果が得られた。

下巻奥書に記された所伝によれば、教家本系統第一類のA隠士得清本系統に属する日大本の持つ特徴が見られないことは、上巻奥書の有無によって内容が異なる可能性のあることを示唆している。また、上巻奥書を持つ伝宗長筆本・片山本・関大本上巻の三本は、分類される系統が異なりながらもその内容の近さが確認できることから、上巻奥書を持たないものとの内容の相違は、系統が分かれる以前つまり教賢僧正本以前には生じていたと考えられよう。なお、今回詳しい検証を行わなかったC玄旨本系統諸本については、日大本と同じく上巻奥書を持たないものではあるが、さらに多くの本を経ていることもあり、別に検討を要する課題であろう。

新たにその可能性を指摘しうる上巻奥書を持つ写本の姿は、片山本・関大本上巻そして伝宗長筆本に残されていると考えられるが、関大本は上巻のみしか残らない。先に触れたように完本である片山本も、現在は行方知れずと聞く。つまり現段階では、全体を確認できる写本は伝宗長筆本しか存在せず、その点においても重要な写本であるといえよう。そのため、全体的な姿はなんらかの形で別の機会に提示したい。

伝宗長筆本は、もちろん独自異文も存在するが、親本を忠実に書写したと思われるものである。さらに、奥書から判断すれば、隠士得清本以降は何の本も経ていないため、他本による影響も少ないものと思われる。現在唯一上巻奥書を持つ完本として存在する伝宗長筆本は、秋篠月清集写本のあらたな一本として大きな意味を持つものであると考える。

注

- (1) 京都女子大学図書館編『京都女子大学図書館蔵谷山文庫目録』（京都女子大学図書館）。下巻は亭子院歌合・千蔭正琴百首歌合と合冊。
- (2) 上巻末の配列と欠歌に関しては後述する。このほか、伝宗長筆本では、七七八・一三五八・一三五九詞書を欠く。
- (3) 諸本の呼称については、諸研究によって統一されないものもあるため、本稿では片山亨氏『校本秋篠月清集とその研究』（笠間書院・一九七六年六月）における名称を用いる。また、教家本系統諸本の引用や、本文系統の分類とその呼称、教家本独自歌の歌番号も同書によった。但し、関西大学図書館本・上巻（以下、関大本上巻と称す）本文の引用は、原本の紙焼より私に翻刻したものによる。
- (4) 同写本は、現在、日本大学総合学術情報センター蔵であり、古典籍資料目録編集委員会編『日本大学総合学術情報センター所蔵古典籍資料目録』五（歌書編三）（日本大学総合学術情報センター・二〇〇八年三月）に巻頭と巻末の影印とともに紹介されている。それによれば、室町時代中期写とされる。
- (5) 松田武夫氏『王朝和歌集の研究』（巖松堂書店・一九三六年十月）・第三章第三節秋篠月清集成立年代攷（『国語と国文学』一一・一二・一九三五年十二月初出）
- (6) 五味文彦氏は『明月記の史料学』（青史出版・二〇〇〇年七月）・第三・一・五九条教家と出家において、「権大納言藤原」を教家とすることについて疑義を唱え、承久三年時点で権大納言であった人物、②奥書より家隆筆本の存在が認められ、それによって家隆と関係深い人物であるなどの根拠から、教家の異母弟であった基家である可能性を指摘した。
- (7) 稲田利徳氏『正徹の研究 中世歌人研究』（笠間書院・一九七八年三月）第一篇第二章第三節正徹の書写活動について（『中世文芸』五〇（前集）・一九七二年六月初出）
- (8) 片山亨氏『校本秋篠月清集とその研究』（笠間書院・一九七六年六月）。以下、片山氏論の引用は同書により、その際は同書の頁数のみ記す。
- (9) 関西大学図書館本の下巻について片山氏は、教家本系統第二類の河野本の転写本でありながら「定家本系が混入した

第三系第二類の混淆本（稿者注：教家本系統を定家本系統で校合した教家本系混淆本）の詞書が混入している」（四二七頁）ことから、混淆本系統第二類に分類しており、上巻とは別系統であるとする。なお、下巻には、上巻が有する朱墨点集付が見られないことも、上下巻で系統が異なることを物語っている。

(10) なお、関大本は上巻下巻ともに全体をとおして勝負付が付されている。関大本の勝負付は河野本に近いことが片山氏によって指摘されており（四二六頁）、上巻もまた「河野本系または河野本が校合した和歌所御本によって校合されたものと思われる」（四〇九―四一〇頁）とされることから、関大本の勝負付は関大本独自のものではなく、河野本との校合によって書き入れられたものと見るべきであろう。

(11) 後述するが、伝宗長筆本は下句にも点を付す箇所があるため、実際の点数は朱墨点ともに六点ずつ多い。

(12) ここでいう「独自異文」とは、まず天理図書館甲本本文に対する異同を異文とみなし、それが教家本系統第一類に属する他本とまったく一致しない異文である場合の句のこととする。そのため、教家本系統第一類諸本の一本のみが天理図書館甲本本文と一致するような場合、それを異文とは認めない。また、異文注記をとまなう句に関しては、異文注記を持つ句の本文との一致、異文注記を持つ句の異文との一致を区別して扱い、本文と一致する場合は独自異文との一致とみなす。なお、詞書については、特に部類歌部において「冬歌よみけるなかに」と「冬の歌よみけるなかに」といった、異同とみなすべきか判断に迷うものが多いため、ここでは歌句の異同のみを取り上げることとする。

(13) 以下に掲出する本文は、私に翻刻した伝宗長筆本本文を用い、歌本文の異同箇所には傍線を付した。朱による書き入れには〔朱〕と記し、朱墨点や集付は省略した。なお、歌番号や対照する定家本系統本文の引用には、新編国歌大観を用いた。

(14) この十九首のほか、異文注記を持つ句の異文と一致する箇所が三箇所存在する。

(15) 有吉保氏『千五百番歌合の校本とその研究』（風間書房・一九六八年四月）によると、現在は国立歴史民俗博物館蔵となっている高松宮家旧蔵本と東京大学国文学研究室蔵本は、「玉まく数や」という本文に「玉まくくすや」と異文注記を施しているという。

(16) このうち、二四三には蓬左本が朱墨点、一二六九には刈谷図書館村上忠順書入本が朱点を付すが、互いの影響関係がうかがえるものではなく、伝宗長筆本と同じく初句の類似による誤記であると思われる。

(17) 七首十四行という少なくとも少量の歌が異なる箇所配されることから、本書のよった系統の本には錯簡があつたとも想定され、伝宗長筆本以前の姿が保存されていることをうかがわせる。

(本学大学院研修者)

年			所伝		伝宗長筆本	日大本	片山本	蓬左本	桂宮本	神宮本	関大本上巻
承久三 1221	11月	慈円・俊成の合点のある本を教家 が書写①			伝連歌師宗長 筆本	伝東常縁筆本の 正徹焼別本の 転写本	明応二年奥書 本	玄旨本以前の 教賢僧正本か らの転写本 江戸初期写	智仁親王筆本 の六家集の転 写本 江戸初期写		江戸初期写
安貞二 1228	11月	家隆自筆本を書写②									
文永五 1268	12月	再び、家隆自筆本を書写③									
応永十六 1409	12月	冷泉為尹本を正徹が書写(21日)④ 〈隠士得清本〉	※14日(上册)	※14日(上册)							※14日
応永二十七 1420	12月	正徹が焼別に蔵じた旨の識語 〈正徹焼別本〉									
文安三 1446	8月	教賢僧正が隠士得清本を書写 〈教賢僧正本〉									
康生二 1456	2月	教賢僧正本を書写									
康生三 1457	6月	正徹(77歳)が隠士得清本を書写 〈隠士得清本2〉									
明応二 1493	7月										
文亀三 1503	5月	隠士得清本2を伊佐幸綱が書写									
永正五 1508	8月										
		細川幽斎が教賢僧正本を書写 〈玄旨本〉									
安永五 1776	3月										

※網掛けが、奥書に記されている所伝で該当するもの。

付表 伝宗長筆本及び教家本第一類諸本の奥書に記された所伝

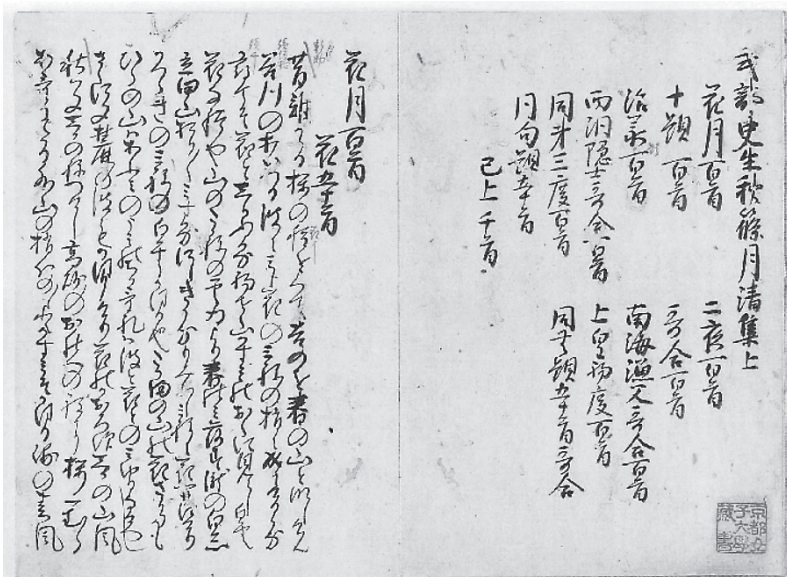


図 I 伝宗長筆本上巻巻頭（二丁裏・三丁表）

[illegible]